

吊り橋6号：ピン川（キナバタンガン川支流）

投稿日：2013/09/23 カテゴリー：[吊り橋プロジェクト](#), [吊り橋プロジェクト](#)：[これまでに架けた吊り橋](#)

設置場所

マレーシア国サバ州キナバタンガン地区、キナバタンガン川支流ピン川
([地図](#))

設置時期

2013年 9月20日、21日

参加者

BCTJから：

山田由香さん（正会員）、東井ひろ子さん（正会員）、中西氏（サラヤ、BCTJ理事）、荒川氏（マイチケット、BCTJ理事）、青木（BCTJ事務局長、理事）

現地から

BatuPuteh村村民

＊地域の村周辺地域の環境保全と観光推進を進める地域住民組織

MESCOTのメンバー。MESCOTの構想の実務を行うのが「KOPEL」という住民組織で、BCTJメンバーが宿泊する村のホームステイプロジェクトや吊橋プロジェクトに利用される道具やボートの貸し出しなどを管理

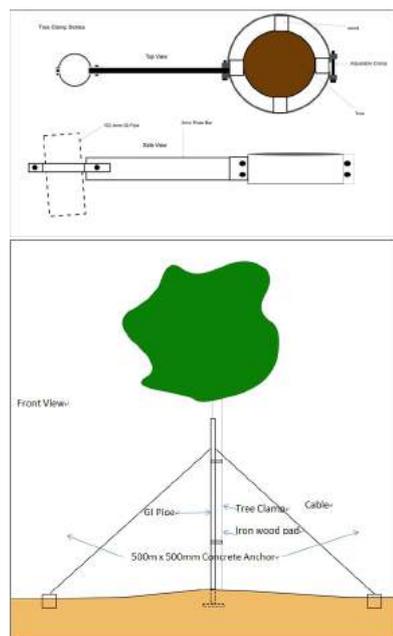
架橋レポート：青木崇史

2013年9月20、21日にマレーシア国ボルネオ島北東部を流れるキナバタンガン川支流ピン川にて6号橋の設置作業を行ってきました。



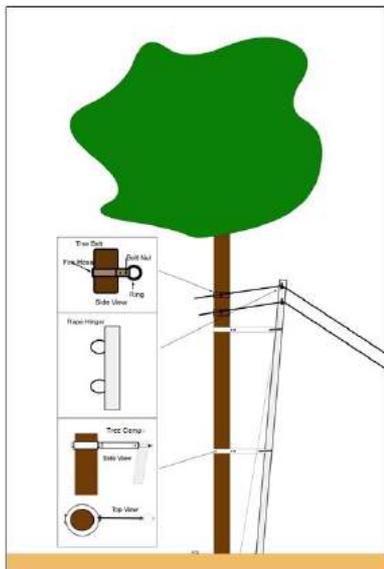
今回のプロジェクトのリーダー、ロスリー氏のレクチャーを受けるBCTJスタッフ。ロスリー氏は過去の吊り橋プロジェクトにも参加され、とても経験が豊富です。今回の架橋作業は過去の苦い失敗経験が生かされ、下準備を除けばわずか1日半で架橋できるという、とてもスピーディな作業となりました。

BCTJチームが現地に到着すると、すでに消防ホースのロープが横たわっていました。ロープは過去最長となる75m。川幅が広い場所に架ける必要があるためです。こんなに長いロープをサルが渡るのか、と質問したのですが、現地の方は必ず渡るはずだ、と話していました。75mのロープはそれでも長さが不足し、現場で10mほど継ぎ足すこととなります。



ロスリー氏が作成した設計図。支柱が必要な樹木にどのように支柱を取り付けるか、その部品の形状はどのような形か、がわかります。

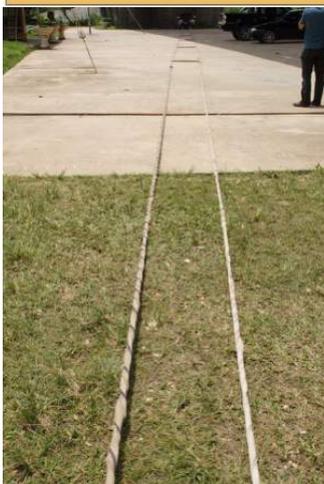
1号橋や崩落してしまった2号橋は人間が安心して渡れるような構造になっていました。しかしその後、オランウータンはもっと簡単な構造の吊り橋でも簡単に渡れるとう事実が判明したため、吊り橋は2本のロープを上下平行に渡すシンプルな構造です。



オランウータンが握りやすいようにロープはねじってありますが、使用する2本の消防ホースは逆方向にねじり、並べてありました。

同方向にねじると、船に乗せて現場に運ぶまでに2本のロープが絡まってしまい、解くのにムダな時間がかかるためです。ホースは固くて長いので、一度絡まってしまうと解くのに一苦労。

5本目の吊り橋を架けた時には、同方向にねじった2本のロープが複雑に絡んでしまい、解くのに丸1日を要したとか。今回はその反省が生きています。



支柱とする木の選定は、現場をよく知る現地のメンバーにお願いしています。大木であればどれでもよい、というわけではなく、果物になる、などオランウータンが使用しそうな条件を備えていること、実際に周辺でオランウータンが目撃されていること、対岸へ渡る行為に意味があることなどいくつかの条件をクリアしていなければなりません。そのため、1年を通じて現場を観察している現地の人々でないと選ぶことができないのです。

今回の架橋場所は両岸とも決して豊かな樹林とは言えません。胸高直径の大きな木は少なく、吊り橋の強度を維持するために理想的な環境とはなりません。川の南側の森林は劣化しており、広さも充分ではありません。

オランウータンが周囲に生息してことはわかっているのですが、1匹あたりの広さが足りていない状況です。一方、北側の森は広く、条件も恵まれているため、吊り橋を架けることで、生活環境の悪いもりから良い森へと移動することができるようになるはずで



選んだ木のうち1本は、吊り橋を支えるためには少し強度に不安があったため、樹木を支えるための支柱を取り付けることにしました。そのための器具を手作りします（といっても到着時には完成していたのしたが）。幹に取り付ける部分は、将来幹が成長して太くなることを考慮し、調節できるようにになっています。

架橋場所へはバトゥプティ村から10分ほど。キナバタンガン川からピン川に入ります。写真はピン川支流の様子。川岸の土は粘土質のため、氾濫すると木が根こそぎ持っていかれるため、岸からやや離れた木を支柱に選ぶ必要があります。



樹木の周りは既に草木が刈り取られ、作業がしやすいようになっていましたが、これも過去の経験を生かしたKOPELの皆さんが事前に数日架けて行ってくれた作業です。お陰で格段に仕事がしやすくなっていました。

支柱にする樹木は、川から数メートル上にあります。粘土質の地面は水を含み、ぬかるんでいて滑りやすいため、昇り降りするだけでも一苦勞。



南側の樹木に支柱を取り付けるための部品をつけます。支柱はワイヤーで左右から引張って支えるのですが、ワイヤーを固定するためのコンクリー

トブロックも予め作られていました。



地上5～6mのところに器具をつけるのですが、以前にツリークライミングの講習を受けたKOPELの若者たちは難なく登って行きます。ロープと工具を慣れた手つきで操り、器具を固定しました。

対岸の樹木はロープを支えるのに十分な大きさがあるため、支柱はつけません。金属の器具もとりつけず、短めに切った消防ホースで吊り橋を通すための輪っかを作り、それを樹木に巻きつけて固定します。非常に原始的ですが、大きな効果を発揮します。



日中は35度前後の気温と体感で100%はあろうかという湿気で、体力を猛烈に消費します。全員が1.5リットルのペットボトルを数本持参していましたが、それでも水が足りなく思えるほどでした。





片方のロープがしっかりと固定されたらボートでロープを渡し、今度は対岸に移動します。綱引きの要領で、ロープを引っ張り上げるのですが、全長70mのロープは重量もかなりのものですが、共同作業がスムーズに進んだお陰で、水面から8mほどのところに水平に日本のロープが張られました。





ロスリー氏はほぼ完成した吊り橋を見て、「この高さで洪水に耐えられるかはわからない。もう少し高くする必要があるかもしれない」と言っていました。

その言葉どおり、数週間後にやはりこれではまだ低いということで支柱を数メートル延長し、より高い位置に吊り橋を移動する工事を進める連絡が届きました。

その工事が完成した後、野生動物監視用のセンサーカメラを取り付け、実際にオランウータンや他のサルがわたっているかを確認します。

私は初めての参加でしたが、ロスリー氏のリーダーシップおよびKOPELメンバーの働きっぷりは素晴らしく、過去の失敗経験が活かされたtとてもスムーズな作業に見えました。